

所で保母は大きな第五恩物を子供に與へ、參觀者は自由に子供等の間を廻つて其の仕事の仕振を視察した。暫くの間子供等は全く自分を忘れて仕舞つて働いて居たが、終に各子供の考と能力とを表はした所の！ 勿論、其の形は各々異つて居るが！ 心から楽しき十五の別々の形が出來上つた。參觀者は保母の方を向いて「是れは不思議な事！ 私には全く分りませんが、何うして此處までに出來たのてせう」保母は直ぐ答へる事が出來た。「別に何も不思議な事はありません。是れは只獨立した動作の確實なる成長の結果に過ぎないのですから。初めに私は色々な材料を自由に

獨立して使ふ習慣を此の小さい人に訓練したのです。今御觀になつた現狀は此の方法の自然の結果であります。」故に私は恩物を使はせる上には、此の計劃を若い保母達に躊躇なく提供したのである。私は此の計劃を堅く信ずる者である。私は此の方法が、フレイベル法の仕方から何れ位離れて來て居るかを能く知つては居るが、併し子供の躰の正しい方法の根本である所のフレイベルの教育説の生きた主義を最も確實に體現して居るものである事を信ずるのである。(續く)

保育日記

砂場自由遊

京都眞乘院 才 才 ツ 力

大正十三年九月二十四日午前十時——十一時。

白組。希望兒(約二十名)。久しぶりの登園に、大上先生にお願いして白組の砂遊を見せていただく事にした。

鐘がなつてから一度幼児を保育室に入れ氣を落付かせてから、希望兒を砂場で遊ばしめられた。はちやま四箱を貸與ふ。

増田悦子さんと橋本依子さんの二人はいつもグループになつて遊んでゐる。小生の目についてゐるうちではまづ一等よく相互生活が行はれてゐる組だらう。少し離れて別別に構成をしてゐる時でも、折々話會ひ又は相手をちらと見たりして、どしどし進んで行く所に、確に「心と心との相互作用」が行はれてゐると思はれる。

今日の砂遊で目下解決せねばならぬ問題は一つの組と他の組との衝突であつた。増田さんの工事がどん／＼進んで行くので陽の方でまだ馴れぬらしく、一人で山をこしらへてゐる鹿島さんと腕が突き當るので「押しに来る」と小生に訴へる。「鹿島さんがそこでしてゐられるのだから、こつち側へいらつしやい」と、小生の側の僅かな地面を譲つた。これにて小生は殆ど立錘の餘地もなし。小生の考では此際よく出来る増田さんにも、寧ろ砂遊にはまだ初心であるらしい鹿島さんを指導して、此遊びの興味を感ぜしめる

迄にさせたかつた。靜かに、しかも側目もふらずに、自己の現在有する力だけで遊んでゐる彼の姿を見る時、その内心の怒は増田さんに優るとも劣らぬものありと思はれる。

もう一つの衝突は、橋本さんと高田光治さんであつた。十時半に鐘が鳴つたが續いて遊ばせてゐた時だが、橋本さんの組は山のトンネルとお稻荷さんとの工事が出来上つて平地に川の土地を築きつゝある時、一方高田さんの一組は漸次範圍の擴張につれて橋本さんの領土に侵入して来る。

平地に僅かの起伏を作つてゐる橋本さんと、この工事を懷して自己の計劃通りどしどし進行して來るので、橋本さんは小生に其旨を訴へる。小生は「あなたは何處まで出来ましたか」と兩方に聞いて「それでは此川と川とを續かせたらよいでせう。……人のしたのを懷さないで、人のしたのを使つて自分も一所にこしらへて行きなさい」と云つたのを高田さんが解してであらうか「自分のトンネルと橋本さんのトンネルを通る線路を續かせて、其間を横切つてゐる川に鐵橋を架けやう」と申出でた。それには橋本さんの作つた線路へ支線を出す爲、提防の一部を取除かねばならな

かつたが、それは自己の作品を一層優秀ならしめる爲でもあり、斯くして初めて兩方の組の「變化ある統一」「異なる個性の相助關係」即調和が行はれるのであるからして、小生は此高田さんの提言を目下の問題への喜ばしき解決の曙光と受け入れて其通りにした。

かまぼこ板で鐵橋をかける時、橋本さんもそれに加つて此處に兩軍同盟の握手を結ばせたら、一層興味多いものだつたらうが、橋本さんは此の時、他の方をせつせとやつてゐたので、それ迄には至らなかつた。

橋本さんは先程から大分遊んだので、既に興味の頂點クライマックスを越えて稍疲れ氣味に見えるのに反し、高田さんは今將に興味の増々ある時と見えたので、小生は橋本さんに「もうあなたは大分に遊んだのだから、此處までこしらへたのを全部高田さんに譲つてあげなさい。彼が之をあなたの計劃通り受納するか、それとも自己の計劃を加へて變更せんとするか、總てを彼に譲つてしばらく傍觀者の位置に立たうじやありませんか」といふ様な意味の言葉云つたので、橋本さんは漸て砂場を出た。

次に今日の此保育に特に注目すべきは、上村登さんの考案であつた。彼は家から持つて來たのであらう、カルタの札の様な厚紙を四角に砂上に立て並べて家を造り、其上に更に屋根をこしらへ、且破れたはやまの鳥居のかけらを用ひて煙突まで立ててゐた。こんな家が二三軒並んで、又一方には此一枚の札をうまく折り曲げて船をこしらへてゐた。この考案は丁度先程竹内先生が小生に見せられた自働車の厚紙細工と同種の手工に屬するものなのですこぶる興味を感じた。この尊い表現を學んで「厚紙細工」とでも稱すべき一新保育科目を創設する事にすれば、砂遊と聯絡して保育科目相互の綜合の一端ともなり、又製作活動を幼児の生活に直接關係ならしめる様に具體化する事も出來て、今回の講習の主旨にも叶ふ様に思ふ。

終に望んで一言して置く。小生が幼稚園に於て砂場を最も神聖な場所と云ひ、砂遊に重大なる價値を置くは、只に砂場が幼児の自發活動をなすに格好の場所であるのみならず、實に先生が子供より學ぶべき最適の絶好の場面を造る

からである。監督や指導の爲め先生が附いてゐるといふのは未だ初歩の見に過ぎない。砂場の眞の價値は幼児が仲善く協力して遊んでゐる時、側らより之を熟視してゐる先生もいつしか我を忘れて、其零團氣の中に包攝せられてしまふ時に初めて現はれやう。斯くして再び我に歸れる先生の心の中には、今迄に無かつた、あるものが得られやう。

これを悅樂の境と云はうか、感激、生命と云はうか、或は「教育的惜心」と云はうか、「神性」と云はうか、言葉の末では云ひ表し得ないが、兎に角保育者に永遠の生命を與

ある一日（園の音信中より）

土浦幼稚園 吉川コハル

八時半の鐘がカン／＼とひびく、ブランコからおすべりから、シーソーから、山茶花の下から、と急いで子達は組々の列に入る。かくしてお庭の一隅に整列し、姿勢を正して東の方に向つて 天皇陛下に御禮する。幼い子達にも 天皇陛下の尊さはわかるのか、此御禮は特別に丁寧にする「お早う」もすんで、青い空澄み渡る空気に一同が深

へ、其の天職を楽しましむるに充分なる體驗である。小生は自分の小學時代に、土曜より日曜にかけて濱邊で砂遊をした時の愉快さを思ひ起して、もう一度あの境地を味ひたひと思ふ。それをあこがれ望みつゝ機會ある度に我國の砂場に行くのだが、今日の現状ではまだ／＼前途遼遠の感がある。しかし決して失望はしない。先生方の御指導と御助力とを仰ぎつゝ、理想の園に向つて歩一歩と堅實な歩みを進めて行かうと思ふ。

（廿六日夜九時半）

呼吸をして居ると、丁度此時、

唸りをたてゝ飛行船が雄大な姿を現して來た。

ワット云ふ聲、手を擧げる、萬歳を叫ぶ、保姆も子供になつて叫ぶ。飛行船は常になく低く、低く、次第に低く、「アレお船の中で何か振つて居る」と、いふものもある。うなりをたてゝ青空にと歌ひ出すもある。飛行船は低く緩